

ちばしや通信

Vol.17



画 くさびら八郎

【トピック】

- | | |
|---------------------|---------------|
| ♪ 「寄り添うケアのはじまり」 | ♪ つれづれなるままに |
| ♪ 「心地よい関係性のバランス」 | ♪ 各種イベント案内 |
| ♪ 私の子育て奮闘記 | ♪ “ときがね”なひととき |
| ♪ 「はい、よりそいホットラインです」 | ♪ 法人からのお知らせ |

寄り添うケアのはじまり

『愛し合っていた二人は別々の場所で最期を②』

藤子さんが宅老所を利用されるようになり、利雄さんと二人の自宅での暮らしは穏やかにしばらく続いていました。近所の方々も温かく見守ってくださいようになりました。利雄さんの藤子さんに対する愛情はすごかったです。身体はお元気でしたが認知症が進んでいる藤子さんは自分で食事を摂ることはできませんでした。利雄さんはいつもニコニコ笑顔で一口一口ゆっくりと藤子さんの食事介助を毎回されていました。

ある時、僕は利雄さんに厳しく叱られました。藤子さんは夕方にちゃんとお家にお送りするにも関わらず、利雄さんは日中、藤子さんの様子をちょくちょく見に来られていました。ある時、スタッフが他の御利用者のお世話をしていると「お前たちは、なんで藤子の世話をし

ないんだ。藤子の世話だけすれば良い」と怒るんです。他の人より自分の妻だけを大事にしろということだったんでしょう。とにかく藤子さんのことが愛おしくてたまらなかつたようです。

藤子さんは全く食事を摂られず入院されたこともありました。その時もまた利雄さんの説得が大変です。「入院なんかしたら注射をされるから可哀想だ。入院なんかせんでよか」とかたくなに拒まれるのです。2〜3日ですからなんとか納得していただき入院になると利雄さんは、3日3晩藤子さんの側から離れずつきつきりでした。利雄さんも高齢だったので、僕らが身体を心配して家で休むように言っても勿論言うことは聞かれません。「俺がここを離れたら、藤子が点滴を外さないよ

うに手を縛るだろう。だから、俺が見張っとく」というのです。僕はまだこの当時、結婚はしていませんでしたが自分が歳をとった時、奥さんにここまで出来るだろうかと考えさせられました。

藤子さんは、徐々に身体機能が低下し自分で歩くことが出来なくなりました。また飲み込みも悪くなり咽に引掛けることも多くなりました。利雄さんも家で転倒することがあったり、時にはトイレが間に合わなくてズボン濡らしてしまうことありました。藤子さんが食べ物うまく飲み込めないということを何度も利雄さんに伝えても、

藤子さんに元気になって欲しい、きつとまた元気になると思いい、利雄さんは藤子さんの口に食べ物運び続けていました。それによって周囲の私達がひやっとする場面も何度かありました。二人きりの時に、藤子さんが倒れてきて、利雄さんに覆いかぶさってしまったら利雄

さんは起こすことはできない、そうなったら二人とも危険な状態になってしまう」と僕は思いい、利雄さんに自宅での二人きり生活はもう難しいから宅老所に行きましよう」と提案をしました。

これにはさすがに利雄さんも怒ることなくすんなり了解してくださいました。利雄さんも自分の身体の不安もあつたのでしよう。

しかし、これが後々、利雄さんと藤子さんに対して安易な提案だったんじゃないかと今でも心につつかえている大きな出来事となつたのです。

利雄さんと藤子さんが宅老所で生活をするようになり1か月も経っていない頃でした。利雄さんの表情は険しくなりイライラすることが多くなりました。

当時、その宅老所は少ない間取りで個室も無い、小さな家でした。日中は他の御利用者も当然いらつしやり、利雄さんと藤子さんが二人きりで過ごすこと

のできるスペースはありませんでした。当たり前のことですが、

四六時中、赤の他人が側にいる生活が利雄さんには耐えられなくなつたのだと思います。そして利雄さんも徐々に認知症の症状が始め藤子さんへの関わりも少なくなりまりました。藤子さんも口からの食事が難しくなってきました。僕は様々な事情があつてなかなか関われない利雄さん達の娘さんと息子さんに宅老所での生活の限界をお伝えし、特養の入所を検討しました。

僕はお二人が一つの部屋で一緒に過ごせる特養を探しましたが、どこからも断られ見つけることはできませんでした。最悪、同じ部屋ではなくとも同じ場所でもと探しましたがそれも叶わず、お二人はそれぞれ別々の特養に入所されることになってしまったのです。

それから1か月後、利雄さんが先に亡くられました。そのことを知らず藤子さんは寝たきりの状態で過ごされ、半年ほど

経過したでしょうが病院でお亡くなりになりました。

こんな結末になろうとは、僕は全く予想していませんでした。宅老所を始めるきっかけをくださったのは藤子さんでした。一人の方を支えるために必要な事を考え、行動を起こすことの大切を教えてくださいました。藤子さんです。サービスを整え、それに合う人を集め提供するのではなく、出会ったその方に必要なことを創り柔軟に提供していくことが、僕らの責任であることを教えてくださいました。僕も藤子さんです。そして、関わること、時間を共に過ごすことの大切さを教えてくださいました。藤子さんです。しかし、このような結果になってしまいました。あれほど藤子さんの側に居続けたかった利雄さんはどんな思いだったのだろう。僕は愛し合うお二人の何を支えることができたのだろうか。もう少し、何かできることは無かったのだろうか。15年以上経った今で

も思い起こされます。

黒岩尚文（くろいわなおふみ）

高校卒業時、お金が全く無くて進路指導の先生から「消防士がいい」と言われ喜んで受験。しかし見事不合格。気を取り直し当時最も学費の安い福岡大学商学部を受験。まぐれで合格。お好み焼きを4年間焼き続け卒業。卒業後、東京の不動産会社に入社。2ヶ月で鹿児島弁しか使えないことを見抜かれ福岡支店に流される。1年後、フリーの不動産屋となり東京へ戻る。多くの方々にご飯を食べさせて貰いなんとか生きていたが朝、突然、顔面神経麻痺になり帰郷。リハビリの甲斐あつてか、無かつたか1年程かかって今の顔。平成7年4月より福祉の仕事につく。翌年5月より宅老所活動を始める。平成19年6月加治木町で共生ホームよかあんべという小さな事業所を開設。細々とやっています。平成22年5月よりトカラ列島宝島、北海道幌加内町にも関わる。



福祉絵本「おじいちゃん人気者」
(1冊：300円)

みんなが、子育てしやすい国へ。

すくすくジャパン!

子ども・子育て支援新制度

内閣府

心地よい関係性のバランス

第5回 弱みのバランスが崩れた時

「弱みでつり合う」

福祉サービスの利用者の立場が、提供者の立場より下である関係性がどうも好きになれなかった。別に見下しているつもりはなかったが、心のどこかで優位に立っている自分に気づき、よく落ち着かない気分になった。ところが、有料サービスを始めた日、不思議な現象が起った。「サービスを利用してもらえないと食べていけない私」と「サービスを利用しなければ生きていけない利用者」のお互いの弱みのような部分が、微妙なバランスでつり合ったのだ。利用者が「ありがとう」と言い、私たちも「ありがとうございまして」と頭を下げる。福祉の現場に入り8年目にして、初めて感じたつり合った感覚だった。

「心地よいバランス」

弱みでつり合うなんて、なんと消極的な現象だろうと思いつながらも、初めてつかんだ確かな感触に、私はそのバランス感に氣にいった。正直に言えば氣にしているもいらぬも、当時の私たちは利用者の利用料で生活していた。だから、「利用したくない」と言われたらアウトだったのだ。必死でまた利用していた。ただ、必死で努力していた。ある利用者が「お母さん、今度お葬式はいつあるの？」と質問して家族をぎよつとさせたらしい。親が誰かの葬式に出席する時に、ぴっころを利用できると思い込んでいたのだ。「誰かが亡くなるのを待っているなんてとんでもない」と慌てた家族は、「お葬式がなくても利用できることを教えたい」と家族に用事がなくても利用してくれるように

なった。当初のぴっころは、障害のある人たちが家族の都合であずけられる場所だった。私たちは、家族の方々が「安心してあずけられる」と、利用者の方々が「あずけられてラッキー」と、思える時間を精いっぱい提供した。その努力とニーズはうまく具合にかみ合って、心地よいバランスを保ち続けた。

「弱みが消えて生まれた矛盾」

しかし、ある時ふと氣がつくと時代もぴっころの状況もすっかり変わっていた。制度ができ、事業所もどんどん増えて、サービスの選択も併用もできるようになった。私は夫をもち、ぴっころの収入に頼らなくても生活が成り立つようになっていた。

「困った時にはいつでも」のぴっころは、楽しむための利用が中心になり、「困った時の利用」を思うように受けられなくなっていた。ついにはどれが「困った時の利用」なのかさえわからなくなり、十分なサービスを提

供できない申し訳なさを感じつつも、利用者にお金で縛られているような思いを抱くこともあった。困った利用者が依頼をし、それに誠意をもって応えることで収入を得るという関係はすでに崩れていた。「そんなに困っていないけどやめるのも悪いから」「楽しむための利用をメインにしたい」というありがたい利用者の氣遣いが、「困っている人を受け入れたいのに楽しむための利用を断れない」「お金をもらっているのだから、楽しませてまた来たいと思わせるサービスをしなくては」という堂々巡りを招いていった。弱みが消えてもお互いに縛りあっているかのようだった。

「弱みを力にする」

弱みでつり合う体験は、確かに大きな発見だった。しかし、それは福祉サービスを続ける健康な関係性ではなかったようだ。福祉サービスは、なくても暮らせるなら利用する必要が

ないもの。それをこちらの経済的な都合で、利用者をサービスにつなぎとめるわけにはいかない。私たちの経済的な弱みは知らず知らずのうちに「お願いだから、利用し続けてください」というメッセージを発してしまふ。そこに上下関係ではないフラットな、あるいは利用者が若干優位な心地よい関係性を感じて利用を続けるうちに、「サービスにしてもらう暮らし」が当たり前になってしまつては本末転倒だ。利用者のおかげで食べていけるという立場を知ることが必要なこと。しかし、こちらの経済状態を配慮して利用してもらふ必要はない。経営を考えればいつまでも利用し続けてほしいのだが、利用者がサービスを不要としたり、他のサービスを使つてもっと幸せに生きるようになつたりすることは喜ぶべきことだ。弱みを力にすることはあつても、利用者に媚びてはいけない。たぶんそういうことだ。

※この原稿は、Juntos (フントス) CLC発行の情報誌からの転載です。著者と発行者承諾のもと転載しています。

大友愛美 (おともよしみ)

北海道生まれ北海道育ち、牛糞の道産子です。大学卒業後、最初の福祉現場、知的障害者入所施設では地域と施設をつなぐコミュニケーションワーカーのような仕事をし、その後は地域で生きる人たちを支える仕事をしました。どちらの現場でも自閉症の人たちとの出会いが多く、たくさん悩み、たくさん学びました。最近では、共生社会の実現を目指すNPO法人での仕事や、福祉の担い手を育てる場(学校や研修)での仕事をしつつ、自閉症など地域で生きにくい状況を抱えた人たちの相談や支援の仕事もしています。他の多くの人と違ついても排除しない、されない社会の構成員になるためには、学ぶだけではなく、いろいろな人と一緒に暮らす練習が必要なのかもしれないな...と感じている今日この頃です。

『びっころ流』

ともに暮らすためのレッスン』

〈1〉600円+税 絶賛販売中〉

※お求めになりたい方は、当法人までご連絡ください。



私の子育て奮闘記

家庭での療育が進むにつれて、いろんな人から、私に対して「前向きだね」等との声をかけられることが多くなつた。実際には私は前向きな部分もあるが、実はすつごくネガティブで落ち込む日々も多いのだ。それは、子どもが生まれる以前の性格なのだが、とにかく小さいころから、簡単に泣いてしまう。悲しい、悔しい、うれしいと思つた瞬間それぞれのタイミングで、すぐ涙が出てしまうのだ。そして、それは未然に防ぐことができない(笑)なので、実は子どもの前でもたくさん泣いているし、夫の前で何度も泣いている。それは今でも、である。ほぼ毎週(！) 例えば、日中休みなしで、動いて、自分の疲れはピーク。そんな状態でてんやわんやになると、思考が自分の限界を超え、マイナス思考が自分の頭の中をぐるぐるし始める。

「あー、なんで、私だけこんなに大変なの？もう、全部やっていること無意味な気がする」等とあふれるようにそんな感情が出てくる。そうすると、しばらく立ち直るのに時間がかかる。そして、それは子供には必ずしも良い影響を与えない。なので、自分の精神状態を前向きに保てるように、実はたくさん

さんの工夫を心掛けている。そのうちの大きな二つ。

一つはピンと来た人には即会いに行く。どんなに遠い人でも。その勘は今まで外れたことがない。ピンときて、タイミングが合い、即行動して会いたい人に会えた時には、そこに今悩んでいることのヒントになることに出会えることが多いのだ。

もう一つはコーチングを受けているということだ。仕事を辞める結論を出す前に始めたコーチング。コーチングは、コーチという別な人の問いかけの力を借りているが、結局は自分との対話である。今療育において何をしなければならぬのか、自分の仕事人生の中で、今の療育期間はどんな意味があるのか等、コーチと対話することにより、クリアになり、行動することができるようになる。

今まで所属があつて、チームで仕事してきた私にとっては、今の家庭での日中一人で行うという環境は、自分が試される場所だ。誰かの何気ない一言で、傷ついてしまつたりすると、ぶれやすいため、客観的に顧みる時間が必要なのだ。このスタイルがよいのかはわからないが、しばらくはそれも家庭療育を進めるための大事な行動だと思つている。(おとめ)

『はい、よりそいホットラインです』

その三 どんな対応をするのでしょうか

さて、今月は前回お伝えした相談内容をいくつか抜粋して、ホットラインのいくつかの対応をご紹介しますと思います。

(1) 『将来のことを考えると気持ち落ち込んでしまっ
た』

Aさん20代男性でした。ホットラインは電話相談以外の支援(面談や相談窓口への同行)も行います。先日初回面談ということで、駅近くの喫茶店で面談をしたところでした。どうして将来が不安なのか聞き進めてみると、大学を出て就職したけれどもパワハラにあい、うつ病を発症して引きこもり生活を5年以上続けていることがわかりました。両親からの仕送りがそろそろ打ち切られると言うことで、『今後の生活費を稼ぐために、

就労したいが就職活動の方法がわからなくて将来を悲観している』ということが整理されました。次回の面談で情報提供をしながら一緒に作戦会議をする約束をしています。相談支援事業所やハローワークへの同行を提案しようと思っています。

(2) 『憧れと恋はちがいますか』

Bさん40代女性。これまでのお話しを聞くと、小学生の頃からいじめにあい、自分に自信がなく、友達と呼べる友達がいないまま大学を卒業し、両親の自営業を手伝っていることがわかりました。このお悩みに関しては、電話相談対応した相談員が自分の経験談など話しているところでした。ホットラインは名前と住所や連絡先を明かさないう限りは、匿名で不特定多数の相談

員と話ができるので、多角的なアイデアや体験談の交流ができることが、価値観の広がりや視野狭窄になりがちな思考回路を開放することもあるようです。

一般社団法人

ひと・くらしサポートネットちば

よりそいホットライン担当

桐谷 陽子



フリーダイヤル つなぐ ささえる
0120-279-338
よりそいホットライン

24時間
通話料無料

心の悩み
学校生活
子育て
セクシュアルマイノリティの悩み
法律の悩み
人間関係の悩み
職場の悩み
住居の悩み
外国人住居の悩み
DV・性暴力の悩み
仕事の悩み

CLICK!

つれづれなるままに

日差しは春を迎えてもまだまだ風が冷たい日々は続いている。暑さ寒さも彼岸までと言われるので、三寒四温の中で本格的な春の到来を心待ちにしている今日この頃である。

さて、10月31日(土)を皮切りに開催した、ときがね街かど福祉塾第6回シリーズも、2月19日(金)の最終回にて無事終了することができた。

夕方、6時からの開催にも関わらず、毎回多くの受講者にご参加頂いたことに感謝すると共に、講師の方々も北海道から九州までと遠方よりおいで頂きました。講師陣から先進事例のお話をお聞きし、これからの本会の業務を進めて行く上で、沢山のヒントを頂くことができた。地域との協働、共生型社会の構築、高齢や障害と向き合っても、共に支え合う暮らし、人がひとを支えるとはどういうことか、実践事例をわかりやすくお

話し頂き、今まで、理屈の上では何となく思っていたことが、自分の中で落ちてきたように感じる。

1900年代前半に活躍した、フランスの作家、サン・テグジュペリに、「人は、障害に向き合った時、自らを発見する」という言葉があるが、高齢になり、体や認知機能が衰えても、生まれつき障害があっても、それはひとつの個性であり、その人がいま真摯に向き合っていることである。

障害は身体機能・器質的障害に限らない、人間として生きて行く過程において、人は、常に障害と向き合い支え、支えられて生きて行くものではないだろうか。本会も高齢や障害をもつ人たちをお預かりしているが、それは、ご本人だけではなく、その方が生きてきた歴史も一緒にお預かりしていることで、人はみな個として尊重され、お互いに支えあうということ、これは事業所と地域との関係も

全く同様なのではないか。

講師の方々からは、「地域で誰もが普通に暮らすとは」、福祉施設と地域の連携、今の時代に最も求められている課題である。「共に支える介護とは」高齢者と子ども・障がい者・困窮者との共生、「人がひとを支えるとは」「地域を支える介護とは」等々、各実践から見えてくることは、弱い者に手を差し伸べるのではなく、「共に生きて行こうよ」という、前号でも述べた、伴奏型支援という、各実践事例は高齢、障がい、生活困窮等、それぞれ違いがあっても、底流に流れているものは同じであるということを考えさせられるものであった。

(総合施設長 齊藤 操)

東金市内の小規模保育事業所紹介

就労などのため家庭で保育のできない保護者に代わって、0～3歳未満の児童を対象とした少人数(定員6～19人)の保育を行う事業です。

(施設名)	(地区)	(対象年齢)
① 託児ルームぐるんぱ	家徳	満3か月～3歳未満
② まりんキッズ	東岩崎	満3か月～3歳未満
③ まりんキッズ第2園	東岩崎	満1歳～3歳未満
④ 東金さくら園	東金	満8か月～3歳未満
⑤ 東金第2さくら園	東新宿	満8か月～3歳未満
⑥ ときがね保育園	東金	満1歳6か月～3歳未満
⑦ いちご保育園	東岩崎	満8か月～3歳未満

(※東金市HPより抜粋。詳細はHPを確認ください。)

きもの地サロン	ヨガサロン	穂垂るの会
<p>着なくなった着物をほどこき、アクセサリー、ポーチ、バッグ、タペストリーなどの小物から服まで、その人に合わせてリメイクするサロンです。</p> <p>開催日：4月11日（月） 4月25日（月）</p> <p>※興味のある方はご連絡ください。 鶴嶺の家（50－0285）</p>	<p>健康管理、仲間づくりにヨガをはじめませんか？</p> <p>旧道の岸本薬局の斜め向かいにある「ありさ」の2階で開催中。</p> <p>開催日：4月6日（水） 4月20日（水）</p> <p>※興味のある方はご連絡ください。 ありさ（50－0362）</p>	<p>介護している方々が集まって日々の苦勞話等を気軽に本音で話し合う会です。</p> <p>開催日時：4月14日（木） 13:30～15:30</p> <p>会場：ふれあいセンター 経費：200円（お茶代） 主催・連絡先：穂垂るの会・井上 (090-7171-1701)</p>

ときがね・街かど福祉塾

「ときがね・街かど福祉塾」は、東金・山武地域の市民や福祉・介護・子育て・まちづくり関係など、人に関わる活動や仕事をしている人たちの学習の場、思いの共有の場、新たな縁（えにし）の場づくりとして実施しています。

東日本大震災以降中断していたものを、昨年10月より、月1回ペースで実施しています。ぜひ、ご参加ください。

対象：興味のある方ならどなたでも
定員：30名

（問合せ先：ちば地域生活支援舎
Tel:0475-53-3630）



《第7回》

「福祉との出会い・・・
総合相談支援と生活困窮者支援を通じて
見えてくるもの」
日時：平成28年3月29日（火）
18:30～20:30
会場：東金市中央公民館・研修室
講師：渋沢 茂
（中核地域生活支援センターひなた
所長）

《第8回》

「地域での子育て支援を考える（仮題）」
日時：平成28年4月26日（火）
18:30～20:30
会場：東金市中央公民館・研修室
講師：調整中

《第9回》

「子どもを取り巻く問題と支援について
～児童養護を中心に～（仮題）」
日時：平成28年5月24日（火）
18:30～20:30
会場：東金市中央公民館・研修室
講師：調整中

ときがね な ひととき

鴉嶺の家（高齢者・障害者）

桜のつばみも膨らんで春の訪れを告げていますね。

暖かくなったと言っても冬季の間活動し続けたストーブは、未だにフル活動中、寒さに弱いスタッフとご利用者の方に囲まれて、ストーブもなかなかお休みを頂けないようです（笑）

暖かい部屋の中では、ご利用者の方の今まで通りの生活を大切に、ご自身に合った生活をされています。

リビングでテレビを観ながらのんびりされる方、スタッフと

談笑される方、音楽が好きな方はCDを聴き過ぎられています。中には、隣にある児童の施設に遊びに行く方もいらっしやいます。今月はギターのボランティアの方が演奏を披露しに来てくださいます。今回で4回目になります。毎回皆さんのリクエストにお応えして下さいます。楽しい時間を皆さん心待ちにしています。

冬はのんびりと過ごしたので、春になったら八鶴湖に桜を見に出かけるなど春を感じる事ができればいいなと思います。

鴉嶺の家（児童）

早いもので、もうすぐ年度末ですね。個人的に今年度を振り返ってみようと思います。

◆嬉しかった：R君が沢山歩けるようになった。なかなか人の名前を呼ばなかったI君が、最初に私の名前を呼んでくれた。K君・Uちゃんの語彙が増えて、数を数えられるようになった。

野菜嫌いのT君が沢山食べるようになった。M君が声掛けに沢山微笑んでくれた日。

◆焦った：長距離の送迎時、次のお宅でトイレを借りようか迷うくらいギリギリだった時。

◆悲しかった：私だけに叩こうとしたり、つねろうとするYちゃん。一時他児に嫌な事をするので、注意し続けていたら嫌われてしまったらしい。

◆微笑ましい：K君の言う「さようなら」や、ここで覚えたらしいS君（4歳）の「お疲れさま」を聞いた時。Nちゃんが見のよだれを拭いたり、世話を焼いている時。

◆大変だった：やっぱり、偏食の子の食事介助（スタッフ皆めげずに頑張っています！）。

◆笑った：私をあだ名で呼んでいたUちゃんが、突然「○○さん」と苗字で呼んできた時。Aちゃんが、泣きながら訴え続ける時の可愛い姿。Yちゃんの突発的な発言「血豆！」等々。

◆次年度の目標：『今日も一日

楽しく穏やかに』と毎朝唱え、達成率80%を目指す！

子ども支援センター ぽけっと

真冬の寒さも徐々に和らぎ、日も長くなってまいりました。春の訪れを日に日に感じますが、例年のようにスギの花粉も猛威を振るっており、花粉症の人にとっては過ごしづらい時期でもあります。私もマスクとティッシュ、目薬が手放せない毎日なのですが、そんな中でも子ども達は元気いっぱいです。学校から帰ってくると、花粉などものともせず公園へ遊びに出掛けていきます。衛生環境や食生活の変化により、花粉症をはじめとするアレルギー体質の人が昔と比べ増加しているとはよく聞く話ですが、ぽけっとに来ている子ども達は、花粉に関して言えば比較的落ち着いているように見受けられます。これから春休みに入り、子ども達と外出する機会も増えてくるので、その頃にはスギ花粉も終

焉を迎えてくれないかな…と願う今日この頃です。

サポートセンタースピリッツ

スピリッツを開所してから2月1日で3年目に突入しました。この2年間を振り返ってみると、少しずつではありますが、通所や入所する支援とは違うヘルパーが訪問や外出の付き添いを行う支援についてご理解を頂けてきているのかなと感じております。実践を振り返ってみると、ご利用当初は男性ヘルパーを警戒し、なかなか二人で出掛けることが出来なかった40代男性のAさんも今では楽しそうに出掛けて下さるようになりました。少し時間はかかりましたが、ヘルパーを「一緒に出掛けてくれる人」と認識して下さったようです。訪問の支援は、基本マンツーマンの支援なので柔軟性・応用力・判断力・コミュニケーション能力等が問われますので私たちも日々勉強していきたいと思えます。

街かど福祉相談室ると

季節は春へと向かうので気分的にはウキウキした感じ？なのでしょう。梅や桃が咲き、いよいよ桜のシーズンへ。桜と言えば花見、花見と言えば団子。四季を感じるのには目や鼻だけではない、舌からでもありますよね。食べる事でエネルギーを補給する、おいしいものを食べるという気持ちも満たされる。食育と事とはとても大切なことだと思います。私たちの仕事はとにかく目の前のサービスにあてはめがちですが、食べる、寝る等の基本的な生活がどのようになっていくかをお聞きすることからその方の生活全体を把握し、そこからサービスが必要などころへつなげてく。そのことをとても大切にしています。るるとは立ち上げから5年目に突入となります。今まではとにかく計画作成に追われ、計画を作るところという認識が強かったと思いま

すが、これからは相談の部分も皆様に評価されるようにしていきたいと思えます。

ハンドワーク

暖かかったり、寒かったり、何やら忙しい季節ですが、皆様がいかがお過ごしでしょうか？

ハンドワークでは、先月からペン立て作りに取り組んでいます。試作品であった動物のペン立てと2つ組になっているペン立てを気に入って下さった方がいまして、大量の注文依頼が入り、動物のアイデアを色々考えながら、ペン立て作りに励んでいます。

指先を使う細かい作業が非常に多く、筒の中に布を貼る作業は利用者さんだけでなく、職員も四苦八苦！

筒の周りに貼り付けるクラフトテープの色合いも考えながら、利用者さんと職員とで手をとって取り組んでいます。

かばの家

今年も、もう3月に入りました。寒い日が続いたりしていますが、かばの家の利用者さんもスタッフも元気に毎日過ごしています。

ある日の休憩中、利用者さんの一人が支援者のエプロンを身に付けるといふハプニングがありました。その利用者さんは得意そうにニコニコしていました。みんながそれに気付きビックリしたと同時に大笑いしてしまいました。

かばパンでは、求肥入りのきな粉パンとイチゴあんパンの販売を始めました。ぜひ、ご賞味してみてください。



いつだったか店の奥で作業をしていると、何処からか尺八の音が聞こえてきたことがありました。店の外を見ると、なんと虚無僧がこちらに向かって尺八を吹き鳴らしていたのです。私たちは呆然とそれを見ていました。そんな中、一人密かに心躍らせている人がいました。それはKさんです。ふと思いついた私は、Kさんに「見に行ってみようか？」と声を掛けてみました。すると、目を輝かせて「うん！」と大きくうなずきました。実は、Kさんは20代という若さでありながら歌舞伎、時代物、チャンバラが大好きなのです。時代劇に欠かせない虚無僧が目の前に現れたので、とても興奮したそうです。未だに「虚無僧カッコよかったですね♡」と話すことがあります。

彼の口癖は「キンキンズクシー！」たまにお手洗いの事を「廁へ…」や「ご不浄へ…」

ということもあるくらいです。本当に時代劇が好きなんです。

五根の家

◆小規模多機能ホーム

近年、関東でも2月の風習となりつつある恵方巻きを五根の家内でもお年寄りの方達と一緒に作りました。皆さん夢中になつてテーブルへご飯に巻く具材を並べ、自分好みの恵方巻きを作られていました。お刺身を沢山入れる人もいれば、海苔で巻けないほどご飯を山盛りにする人など恵方巻きの出来栄にも個性が表れておりました。

ある方は「昔はお祝い事があつたりすると巻き物を作つて皆に振る舞つたりしたんだけど、最近は作るのも難しいからやらなくなつたよ。今でも作る機会があつたら皆に振る舞つてあげたいね！」との声もありました。

いざ昼食となり、スタッフか

ら「恵方巻きは最後まで無言で食べて！」と伝え、今年の方角の南南東を向き皆で食べ始めると、一口食べたところで「おいしいね〜！」と同時に発声し、「二口目で喋っちゃった！」と大笑い。その後は和気藹々と恵方巻きを楽しみました。日常の食事作りもお年寄りと一緒にする機会を作っていきたいと思えます。

◆グループホーム

新年の挨拶をしたと思つておりましたら、季節はもう春を迎えようとしております。例年に比べ温暖で過ごしやすい日が続きましたが、時々寒さが厳しい時もありました。

2月初めから入居者の方がお一人入院されていましたが、順調に回復され約1ヶ月後には無事に退院されました。入院中、ひ孫ちゃんの面会が一番の励みだったとの事で、ひ孫ちゃんの笑顔が一番の特効薬だったようです。その他のお年寄りはお一

人骨折の方がいましたが、大きく体調を崩すことなく過ごされています。

節分ではスタッフの手作りで鬼のお面を作り、スタッフが鬼役で豆まきをしました。鬼役ではないスタッフのところにも豆が飛び交いとても賑わっていました。お食事は恵方巻きを作り、普段より多く召し上がっている方がほとんどでした。雰囲気が変わるだけで食欲は大分変わりますね。

春暖かくなりましたら、外出する機会も増えます。今まで寒さで外に出られなかったのでお花見外出など楽しみにされています。

季節感を味わいながら、健康で楽しい生活が送れるように行きたいです。



営業…午前10時～午後8時

場所…東金ショッピングセン

ター「サンピア」内1階
(ステージコート脇)

内容…福祉、介護、子育て、
ボランティア・市民活動
に関する情報提供、相談

★福祉・介護・子育て等に
関する情報の掲示・配布
をご希望の方は、本会ま
でご相談ください。

詳しくは、総務・企画課まで
ご連絡ください。

(0475-533630)



《「かばの家」独立!》

平成21年4月より、当法人の
就労継続支援B型事業所ハンド
ワークのひとつの事業所として
「パンの製造・販売」の就労訓
練をしてきた「かばの家」が、
今年(平成28年)4月より、独
立することになりました。運営
主体は、特定非営利活動法人あ
ゆみの里。代表は、かばの家の
所長でもある杉田輝彦さんで
す。場所やスタッフ、メンバー
も変わりません。これからも
「かばパン」をよろしくお願
いします。

《新規事業等のおしらせ》

◆「鶺鴒の家」が、千葉県指
定の小規模型通所介護事業
から、東金市指定の小規模
多機能型居宅介護・サテラ
イトへ移行します。
◆「ハンドワークで」、定員
10名の生活介護事業を開始
します。

《賛助会員の募集》

私たちの活動を支えてくださ
る賛助会員を募集しています。

賛助会費は、一口3,000
円です。賛助会員の皆様には、
毎月19日に情報誌をお届けしま
す。また、当法人の各種イベン
トや企画のご案内もいたしま
す。何卒よろしくお願いたし
ます。

詳しくは、総務・企画課まで
ご連絡ください。

(0475-533630)

ボランティア募集

趣味や特技、仕事を通じて身
につけたスキル、体力等、自分
らしさを生かしたボランティア
活動をやってみませんか?

ボランティア活動を通じて得
られる効果は無限大です。
子どもや障がい者、お年寄り
等、人に関わる活動に興味のあ
る方は、ぜひ当法人にご連絡く
ださい。

(0475-533630)

編集者のつぶやき

「鶺鴒の家」は、制度上のサービスを「通所介護」から「小規模多機能型居宅介護」へ移行することになった。私にとっては、法人理念の実現のために、現時点で一番有効そうな道具に変わった!という認識なのだが…確かに、その道具を有効に使えばの話でもあるが…でも、きっと良いものになる!と私は思うのだ… (jerry)

年明けは寒い日が続きましたが、段々と春の陽気となり暖かくなってきましたね。すでに桜の咲いている所もあり季節の変わり目を感じます。八鶴湖の桜を毎年見に行っている今年も行けたらと思います。(W)



ちばしゃ通信
(Vol.17)

発行日: 2016年3月19日
発行元: ちば地域生活支援舎
編集責任者: 宮下・太齋
連絡先: 0475-53-3630